

<GTEC>通信

難関大個別試験への対応力の育成と 4技能統合型の授業の両立

大阪府立北野高等学校

1873(明治6)年に創立、145年目を迎える伝統校。文武両道を重んじ、逞しい精神として校歌に謳われる「六稜魂」を培う。2年次進級時に進路希望に合わせて、「文科」と「理科」の各小学科に分かれる。「文科」及び「理科」では、それぞれ3年間で25単位以上の専門科目を学習。

文部科学省から「スーパー・グローバル・ハイスクール(SGH)」、大阪府から「グローバル・リーダーズ・ハイスクール(GLHS)」の指定を受け、全校を挙げて、グローバル時代のリーダーにふさわしい資質・能力・態度の育成に力を注いでいる。

基本情報：公立、共学校、文理学科

生徒数：25クラス 1,000名

主な進路実績：国公立大は東京大7名、京大84名、大阪大79名、神戸大26名をはじめ295名(2018年度入試、現浪込)



取り組みのポイント

- 難解な長文読解、英作文指導から、教科書を中心としたアウトプット型授業へと転換
- 生徒の学力・学習観の変容に応じた、3年間を通した技能統合型の授業を実践
- 2020年の大学入試改革を見据え、進路指導・英語指導の両面から「GTEC」を活用

取り組みの背景

全国屈指の進学校である大阪府立北野高等学校は、京都大学をはじめとして最難関大の個別試験に対応する力の育成が求められるため、難読な英文の訳文、講義形式での文法解説など、いわゆる受験突破のための指導を中心に行ってきた。しかし、2014年から大阪府教育委員会の取り組みであるSET(スーパーイングリッシュティーチャー※1)の派遣やTOEFL iBT®対策指導の導入などをきっかけの1つとして、アウトプット活動を重視した英語の授業に切り替えることを決めた。その頃の思いを、英語科の松山知紘先生は次のように語る。「授業の中で音読は行っていましたが、自由に発話したり課題意識を育てたりするアクティブ・ラーニングは行えていませんでした。学習

指導要領が変わり、新科目『コミュニケーション英語』が設けられたタイミングでもあったので、アウトプット活動を盛り込めないかと考えていた頃、林裕子先生と学年を組むことになったのです」

また、前任校の高校が「イングリッシュ・フロンティア・ハイスクール」に指定され、3年間アウトプット活動に取り組んできた英語科の林先生は、「松山先生に声をかけられたことはうれしかったですが、まさか北野高校でアウトプット重視の英語指導ができるとは思いもよりませんでした」と、赴任当初の驚きを振り返る。

(※1) スーパーイングリッシュティーチャー(SET)
大阪府立高等学校教員として、TOEFL iBT®を活用した英語の授業を担当し、英語教育の指導方法・教材の開発、カリキュラムの改善及び、他の英語教諭の能力を高め同教育を担う人材の育成にあたる教員を指す(2014~2017年の取り組み)。

教科書を最大限活用した技能統合型の授業を実践(ディクトグロス+サマリーリテリング)

同校の指導をみていく。

教科書の各レッスンのサマリーを使ってアウトプットを行う「ディクトグロス (dictogloss) + サマリーリテリング」という指導法を導入した(資料1, 2, 3)。ディクトグロスは、まとまりのある文章を聞いて短いメモを取り、そのメモをもとに文章を復元するという一連の活動だ。ステップとしては、教科書のレッスンの要約を3回読みあげる。生徒がそれを聞き取り、聞き取れた単語をメモする。その後、まずは個人でメモをもとに要約を復元。それから4人グループになり、それぞれの要約をつなぎ合わせて、よりよい要約を完成させる。この文章の復元活動の際に、推察したり、辞書を使ったりしながら主体的に英文を作成していくので、文法力・語彙力が非常に伸びるという。

また、文章を復元させた後、模範解答を色々な方法で何度も音読させる。これにより、キーワードをもとに自分の力でサマリーリテリングができるようになる。アウトプットをしながら、教科書で習った文法表現を定着させられるのだ。

ディクトグロスの活動を続けることにより、教科書を使う時間は必然的に増加した。以前は、1レッスンに4時間ほどを充てていたが、今では6〜7時間をかける。それまでは、2年次の秋頃には長文読解演習にシフトする授業を始めることが多かったが、指導を転換してからは2年次12月まで教科書をフルに活用する授業が続いた。

「ディクトグロスを導入した1年目は、活動を丁寧に行いすぎて教科書が終わらないという課題に直面しました。そこで、青森県立田名部高等学校のメソッドを参考にしながら、アウトプット活動に向いている題材かどうかで軽重をつけ授業進度を調整しながら進めることにしたのです」(林先生)

大学受験指導と技能統合型の授業の両立を図るベーストークの取り組み

3年次からは、福岡女学院中学校・高等学校の坂本先生が始められた活動であるベーストーク(BACE Talk)を取り入れた(資料4, 5)。北野高校が従来行ってきたような長文の読解問題に取り組ませた後に、今度はその長文と似たようなテーマでベーストークを行った。例えば、教科書でDNA鑑定のテーマを取り上げているタイミングであれば、「DNA鑑定の是非」について話し合いをさせる。この活動の目標は、英語長文読解を通じて、自分の意見を育み、それを英語でアウトプット

できるようにすることだ。

ベーストークは、アスカー(相づちを打つ人)・スピーカー(話す人)・カウンター(発話語数を数える人)の3人1組でグループになって行う。スピーキングをする際には「ミスを気にせず、どんどん発話しなさい」と伝える。グループの中で役割を変えていくため、他の生徒が話すのを聞きながら、「この理由は説得力がある」あるいは「この表現はまねよう」など学ぶことができる。3回繰り返す中で、完成度のかなり高いスピーキングができるようになるという。50秒間×3回スピーキング活動をさせた後に、80〜100字のエッセイ・ライティングを10分間で完成させる。こうした技能統合的な活動により、生徒に確実な力を育んでいくのだ。

「生徒は入試への意識が強いので、スピーキング活動だけだと、取り組みに意味を見い出せない可能性がありました。ただ、この活動はライティングがあることが大きな利点です。『自由英作文を出題する大学が増えているから良いトレーニングになる』『限られた時間で、きちんとした構成ができるようになることも自由英作文に取り組む時に必要になる』と伝えたことで生徒は積極的にこの活動に取り組んでくれました」(松山先生)

多面的・論理的な思考を養うディベートの取り組み

ベーストークを重ねていると、複数の生徒から「ディベートをしてみたい」という声が上がりはじめた。そこで、大阪府立鳳高等学校の溝畑先生からアイデアをいただいて、松山先生と林先生は、3年次の9月と11月、30分弱の即興型のミニディベートを行うことにした(資料6)。

このディベートは、肯定側・否定側各2人の計4人で行い、MC役を1人、ジャッジ役を3人置く。ディベートのお題はその場で発表し、15分間で自分たちの論を作成する。まず、肯定側・否定側がそれぞれ1分ずつ主張をする。その後、相手の主張や理由、具体例などに突っ込んでいくためのQ&Aと最終準備を3分で行う。その後肯定側・否定側が1分半ずつ相手チームへ反論し自分たちの主張をまとめる。ジャッジ役は「ポイント：主張がわかりやすいか」「理由・具体例：例やデータを用いて、説得力のある説明をしているか」「時間：与えられた時間内でしゃべり続けられたか」といった観点から評価を行う。

9月に開催した1回目のディベートのテーマは、「受験生に彼氏・彼女は必要か」、2回目は、「コンビニの24時間営業は賛成か反対か」とした。

「彼氏・彼女のテーマは盛り上がりましたが、自分の話や想いを主張するばかりになってしまい、ディベートの形にまでなりきっていないように感じました。そこで、2回目はディベートの協会が公開していた比較的説得力ある論理構成をつくりやすいテーマに設定しました」（松山先生）

「一番課題となったのは、Q&Aでした。自分たちの主張もあやふやで揺れ動いている中、即興で相手の主張のポイントをつかんで弱点をついていくのは、高校生にとっては高等技術です。初回は、Q&Aの時間があまり盛り上がりせず、反省しました」（林先生）

ディベートが終わると、ベーストーク同様ディベートのテーマに関して80～100字のエッセイ・ライティングを行った。「自分たちが考えなかったような主張を相手が出してくるのが面白かった」「ジャッジから、予想外の意見が出てきた」といった感想が聞かれたため、多様な人の意見を踏まえていくことで、より論理構成力がつくのではないかと考えたので、賛成・反対どちらの側で書いても良いことにした。

3年次の後半は、例年通り大学入試に向けた問題演習を続けた。しかし、その中でも、問題を解きながらペアになって話し合うなど、対話的に学び合う雰囲気は継続していった。そうしたアウトプット活動の積み重ねにより、英語への苦手意識を抱く生徒が、例年よりも少なくなったという。



左から林裕子先生、松山知紘先生

取り組みの成果と今後に向けて

この学年は、1～3年次まで連続してアウトプット活動に力を入れたことで、例年の3年生と比べ、自由英作文への抵抗感が少なく、評価を得られるような文章を書ける生徒が増えたという。さらにスタディーサポートの結果では、上位層だけでなく中位層以下の生徒が3年間を通して順調に学力を伸ばせるようになってきた。

「2年次の『スタディーサポート』の結果が戻ってきた時に、ベネッセの担当者から『御校は、圧倒的に英作文が強いですね』とコメントをもらいました。英作文対策の時間を特別に設けたわけではなかったのですが、アウトプット活動を続けた結果、自由英作文の力がついていったのだと思い至り、指導への手応えを感じました」（林先生）「継続的なアクティブ・ラーニングの中で、入試を突破できる学力は確実に身につけられるのだということを実感することができました」（松山先生）アウトプット活動を取り入れるにあたって、難読な英文の訳文や入試問題演習を減らしたことで懸念された“アウトプット重視の指導で読解力が下がる”ことはなく、むしろ外部模試やセンター試験等では前年を上回る結果になった。

同校では、新たな取り組みとして1年次に「GTEC」の全員受検を決めた。2020年度からセンター試験に代わって導入される「大学入学共通テスト」では、同テストの英語と資格・検定試験の成績の両方の受験を求める国公立大学が多くなると推測される。そこで、進路指導部からの発案を受け、「GTEC」の導入を決めた。

「学校での全員受検が可能なためデータを把握し、定点観測をしやすいのではないかと考えています。また、他の資格検定試験と比較して、受検料が手頃であることに加え、難易度や出題内容が学習指導要領に即しており、学校として取り入れやすいと感じました」（松山先生）

その活用については今後さらに検討を進めていきたいと考えているという。

「今後、「GTEC」をどのように英語科で活用していくか、有効な方法を考えていきます。授業内のアウトプット活動と「GTEC」の活用で、生徒の力をどう伸ばすしていくことができるか試行錯誤を続けていきます」（林先生）

name:

Lesson 5 "Alex's Lemonade Stand" Summary Activity

A. Listen to the summary of Lesson 5 and write down as much as you can.
(DO NOT try to write down everything! You should write down keywords of the summary.)

B. Based on what you have written down, reproduce the summary of Lesson 5.
You can change some words or phrases as long as they are correct.

Step 1. Chunk Reading

Alex Scott was born in Manchester, Connecticut, / in 1996. // Soon, / she was diagnosed / with a type of childhood cancer. // In 2000, / she happened to see a TV program about lemonade stands / and it gave her the idea / of selling lemonade / to raise money for cancer research. // Alex and her brother / set up the first "Alex's Lemonade Stand for Childhood Cancer," / and the stand became an annual event. // Alex hoped to raise \$1 million / and she said it was possible / if people all around the country / set up lemonade stands. // In 2004, / Alex set up her fifth annual lemonade stand. // On the same day, / lemonade stands opened / in all fifty states, Canada and France / and raised \$300,000. // She passed away 2 months after that, / but her dream was realized / by the end of the year. // In the next year, / Alex's Lemonade Stand Foundation was established / and her spirit lives on through the volunteers.

Step 2 A. Read aloud filling blanks

Alex Scott () in Manchester, Connecticut, in 1996. Soon, she () with a type of childhood cancer. In 2000, she () to see a TV program about lemonade stands and it () her the idea of selling lemonade to () for cancer research. Alex and her brother () the first "Alex's Lemonade Stand for Childhood Cancer," and the stand () an annual event. Alex () to raise \$1 million and she said it () if people all around the country set up lemonade stands. In 2004, Alex set up her fifth annual lemonade stand. On the same day, lemonade stands () in all fifty states, Canada and France and raised \$300,000. She () 2 months after that, but her dream () by the end of the year. In the next year, Alex's Lemonade Stand Foundation () and her spirit () through the volunteers.

Step 2 B. Read aloud filling blanks

Alex Scott was born () Manchester, Connecticut, in 1996. Soon, she was diagnosed () a type of childhood cancer. In 2000, she happened to see a TV program () lemonade stands and it gave her the idea () selling lemonade to raise money () cancer research. Alex and her brother set up the first "Alex's Lemonade Stand for Childhood Cancer," and the stand became an annual event. Alex hoped to raise \$1 million and she said it was possible if people all () the country set up lemonade stands. In 2004, Alex set up her fifth annual lemonade stand. () the same day, lemonade stands opened () all fifty states, Canada and France and raised \$300,000. She passed away 2 months () that, but her dream was realized () the end of the year. () the next year, Alex's Lemonade Stand Foundation was established and her spirit lives on () the volunteers.

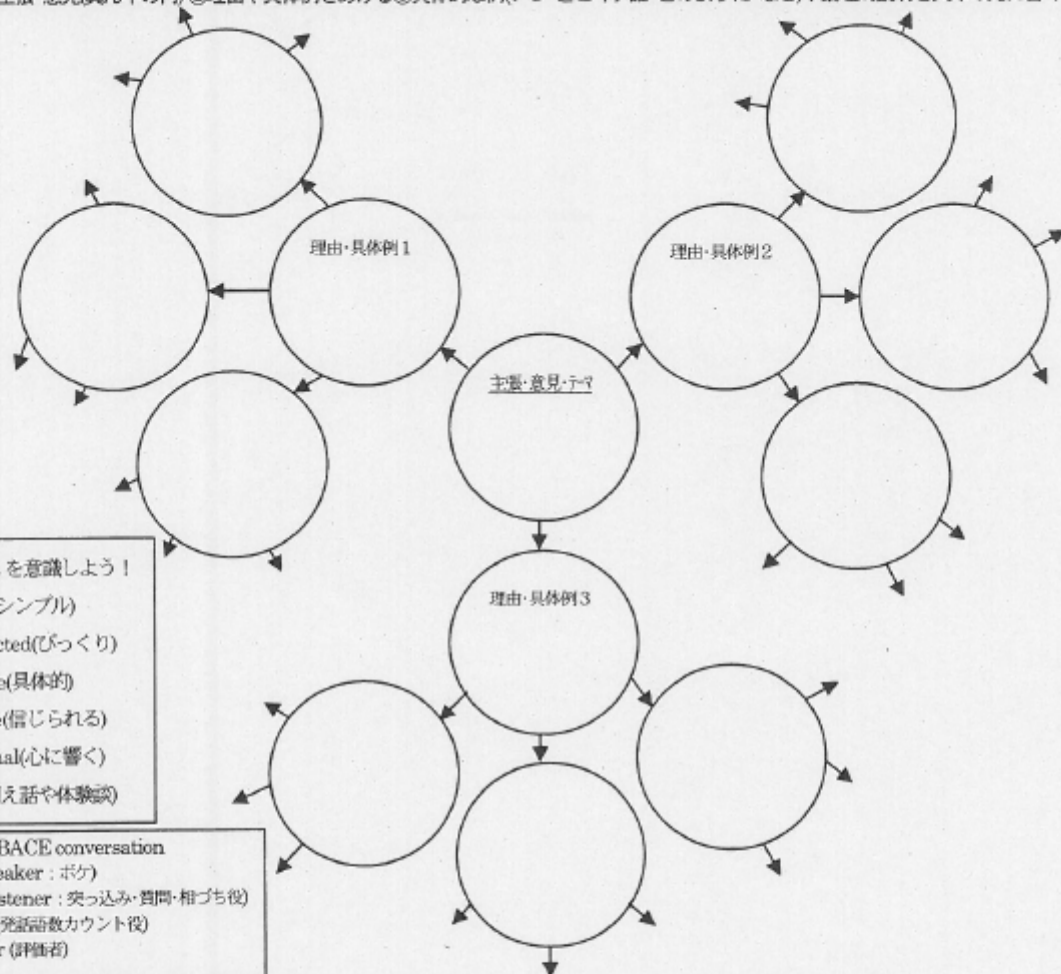
Step 3. Keyword Summary

Alex Scott / Manchester, Connecticut, / in 1996. // Soon, / diagnosed / childhood cancer. // In 2000, / a TV program about lemonade stands / the idea / cancer research. // Alex and her brother / the first "Alex's Lemonade Stand for Childhood Cancer," / an annual event. // raise \$1 million / possible / if people all around the country // In 2004, / her fifth annual lemonade stand. // On the same day, / in all fifty states, Canada and France / \$300,000. // passed away 2 months after that, / was realized // In the next year, / Alex's Lemonade Stand Foundation / and her spirit / the volunteers.

【Topic】

Brainstorming (アイデアを練って文章構成を図式化する)

①自分の主張・意見(真ん中の円) ②理由や具体例をあげる ③具体的な例(いつ・どこ・何・誰・どのように・なぜ)や論理的説明を矢印の先を書く



SUCCESSを意識しよう!

- ①Simple(シンプル)
- ②Unexpected(びっくり)
- ③Concrete(具体的)
- ④Credible(信じられる)
- ⑤Emotional(心に響く)
- ⑥Story(例え話や体験談)

3-Round BACE conversation

Boke (Speaker: ボケ)

Asker (Listener: 突っ込み・質問・相づち役)

Counter (発話回数カウント役)

Evaluator (評価者)

1st Round A-B-C Conversation (3人1組) 2nd Round A-B-C (3人1組) 3rd Round A-B-E (4人1組)

Aさん(Asker 聴き手): 英語でも日本語でも、突っ込み・質問 (いつ/どこ/誰/何/どのように/なぜ) や相づちをし、沈黙をせず話せるように助ける。笑顔を忘れずに。

エッセイの構成: 序論(Introduction) →

Bさん(Speaker 話し手): ①3秒以内 (3秒以内に英語にならなければ日本語混じりでよい。沈黙せず話し続ける。) ②7カウント (天井や床見ない)・身振り・手振りを交えて。

本論(Body) → 結論(Conclusion)

Cさん(Counter 語数カウント役)

Bさんの発話語数を Word Counter を使って数える。

Eさん(Evaluator 評価者)

Bさんの話す態度や内容・Aさんの聴く態度を評価する。

序論	ポイント: 興味を引く (e.g. 自分と反対意見を敢えて提示)	①トピック紹介 (例: 疑問文・一般論で始めるなど)		
	ポイント: 自分の意見・主張をはっきりと述べる	②自分の意見・主張		
本論	ポイント: 理由が1文だけの言いっぱなしで終わらずになぜそう思うのかを補強する	③自分の意見を裏付ける具体例・理由・説明・体験談・新聞・TV・本・著名人の言葉の引用		
		1つ目	2つ目	3つ目
結論	ポイント: 出来れば②を要約表現で言い換え	④結論(Conclusion) 出だしは: In conclusion / So ~ / Therefore ~ / For all these reasons, ~ など		

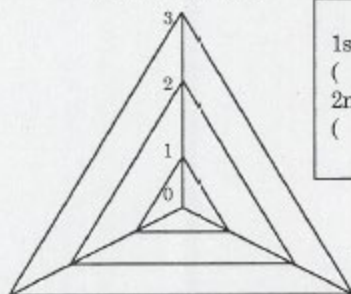
SPEECH EVALUATION SHEET

(レーダーチャートで評価を記入)

評価者の名前 ()

一言感想 ()
(評価者)

- 流暢さ
- ☐ 3秒以上沈黙しない
 - ☐ すべて英語で
 - ☐ ペラペラたくさん



発話語数

1st Round
() words

2nd Round
() words

表現力

- ☐ 説得力・構成力 (論理性・PREP)
- ☐ 独自性 (ユニークさ)
- ☐ 具体性 (5W1H)

態度

- ☐ 間違いない恐れず
- ☐ 聞き取りやすい声で
- ☐ 伝える熱意

Aさんの聴く態度: 評価者 ()

0-3 (全然・ちょっと・まあまあ・完璧)

①質問力 0・1・2・3

話終わった後に興味を広げる質問をした。

②相づち力 0・1・2・3

話す人が安心して話せるよう、相づちやリアクションをしながら聞くことができた。

③笑顔・共感力 0・1・2・3

話す人が、理解され認めてもらっていると安心感を持てるように、共感しながら聞いてあげることができた。

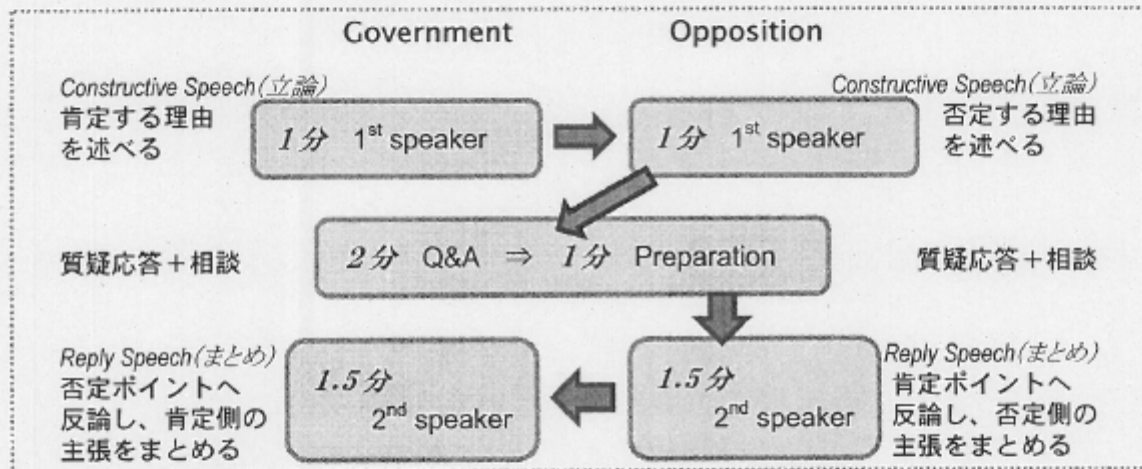
WORD COUNTER Count the number of words spoken by the speaker using your finger or pen

Goal: 100 words per minute

1	40	41	80	81	120	121	160	161	200
2	39	42	79	82	119	122	159	162	199
3	38	43	78	83	118	123	158	163	198
4	37	44	77	84	117	124	157	164	197
5	36	45	76	85	116	125	156	165	196
6	35	46	75	86	115	126	155	166	195
7	34	47	74	87	114	127	154	167	194
8	33	48	73	88	113	128	153	168	193
9	32	49	72	89	112	129	152	169	192
10	31	50	71	90	111	130	151	170	191
11	30	51	70	91	110	131	150	171	190
12	29	52	69	92	109	132	149	172	189
13	28	53	68	93	108	133	148	173	188
14	27	54	67	94	107	134	147	174	187
15	26	55	66	95	106	135	146	175	186
16	25	56	65	96	105	136	145	176	185
17	24	57	64	97	104	137	144	177	184
18	23	58	63	98	103	138	143	178	183
19	22	59	62	99	102	139	142	179	182
20	21	60	61	100	101	140	141	180	181

ミニ即興ディベートのルール

- (1) **概要** ある1つの論題が与えられ、肯定側チーム(Government)と否定側チーム(Opposition)に分かれ、一般聴衆であるジャッジを説得する。肯定側か否定側かは主催者によって決められ、ディベーター自身で選ぶことはできない。より説得力(議論の中身、説明の仕方など)があったチームが勝ちとなる。
- (2) **ディベーターの人数** 各チーム2名の計4名。
- (3) **準備時間** 15分
- (4) **スピーカーの順番、時間** スピーチの順番は下図参照。スピーチ時間は、1分または1.5分である。ただし、後30秒は許容範囲である。司会者はスピーチ終了時間に1回ノック、終了時間30秒後に2回ノックをする。(例: 1.5分のスピーチであれば、1:30で1回ノック、2:00で2回ノック。) スピーカーとスピーカーの間には、準備時間はない。スピーカーは司会者に呼ばれば、速やかにその場で立ち、スピーチを始める。



- (5) **スピーチ内容** 最初のスピーチを Constructive Speech (立論)、後のスピーチを Reply Speech (まとめ) という。Constructive Speech ではどのような論点を述べてもよいが、基本的に Reply Speech では、Constructive Speech で述べていない新しい論点は出せない。
- (6) **Q&A** 肯定側・否定側それぞれが1分スピーチした後で、双方から自由に質疑応答を行う。この時の発言・応答もジャッジの評価対象となる。
- (7) **ディベート終了** ディベートラウンドが終了すれば、対戦相手と握手を交わす。
- (8) **ジャッジ** ジャッジは3人。次の観点で客観的に判定する。

<ポイント> 主張がわかりやすいか。

<理由・具体例> 例やデータを用いて、説得力のある説明をしているか。

<時間> 与えられた時間中、しゃべり続けられたか。

<要約> 相手の主張のポイントをうまくまとめているか。

<反論> 相手の主張に対して、具体的に反論できているか。

<Q&A> 積極的に議論しているか。

★発言者の声の大きさ・スピードが適切でない場合は、評価が低くなる。

*得点記入後、採点用紙を司会に渡す。各ジャッジは両チームに対して、一言コメントを日本語で行う。(この間に、司会者は得点を集計する。)